

# 中城南

——中城南遺跡発掘調査報告書——

1978

小県郡丸子町教育委員会

# 中城南

—中城南遺跡発掘調査報告書—

1978

小県郡丸子町教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、昭和53年10月28日から同年11月10日にかけて実施された長野県小県郡丸子町大字生田字中城に所在する中城南遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 中城南遺跡の発掘調査は、県営依田地区圃場整備事業に先立ち記録保存を目的として行なわれた緊急発掘調査である。
- 3 本書の執筆及び編集は塩入秀敏が行なった。
- 4 遺物の整理は坂口直樹、金井寿子、小林真寿、坂井美嗣及び塩入が行ない、図版の作製は小林・塩入が行なった。写真は塩入が撮影した。
- 5 遺物・実測図・写真は全て丸子町教育委員会が保管している。
- 6 中城南遺跡の発掘調査は、東信土地改良事務所、地元工事委員会のご理解と、丸子町教育委員会の努力で実施された。また、現場作業は長野大学高野豊文教授ゼミの学生諸君のご尽力を頂いた。これら関係者の皆さんに記して感謝申し上げたい。
- 7 調査の本書作製に関して、長野大学高野豊文教授のはか多くの方々のご指導ご助言を頂戴した。特に地主、関国武氏には大変御協力をいただいた。いちいちご芳名を記さないが、感謝の意を表したい。

## 目 次

### 例 言

第1章	環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	2
第2章	発掘調査の経過	7
第1節	発掘調査に至る経過	7
第3章	発掘調査の結果	9
第1節	検出された遺物	9
第2節	出土した遺物	13
第4章	発掘調査のまとめ	21
第5章	中城南遺跡の有する問題点	22

### 〔図版目次〕

第1図 丸子町依田地区遺跡分布図	3
第2図 遺構全測図	9
第3図 第1号住居址実測図	10
第4図 第2号住居址実測図	11
第5図 竪穴状遺構実測図	12
第6図 配石土塗墓実測図	12
第7図 トレンチ出土遺物実測図	14
第8図 第2号住居址出土遺物実測図	15
第9図 竪穴状遺構出土遺物実測図	16
第10図 第2号住居址出土遺物実測図(2)	17
第11図 第1号住居址出土遺物実測図	20
第12図 包含層出土遺物実測図	20

### 〔図表目次〕

第1表 丸子町依田地区遺跡地名表	4
------------------	---

### 〔写真目次〕

第1図 第1号住居址	10
第2図 第2号住居址	11
第3図 第1号住居址カマド	12
第4図 第2号住居址遺物出土状況	15
第5図 竪穴状遺構出土遺物	16
第6図 第2号住居址出土遺物（長胴甕）	18
第7図 トレンチ出土遺物（平瓶口頸部）	18
第8図 出土灰陶陶器類	19
第9図 第1号住居址出土遺物（砥石）	19

# 第1章 環 境

## 第1節 地理的環境

依田川は、最も広い沿岸地帯を最下流の丸子町地区にもつ。ほぼ紡錘形をなすこの平らな地帯の中央を依田川が北流し、最高所の腰越橋付近で標高約550m、最低所の千曲川合流点で約470mをはかり、南北長さ5km、東西最大幅約2kmである。右岸左岸ともに立派な河岸段丘が発達しており、第1段丘、第2段丘、第3段丘とされている。

依田地区はこの左岸一帯に当り、南は独鉱山塊（または、独鉱山脈の東端の御岳山塊）の東端岩谷堂あたりから始まって、北は小牧山塊（または、小牧山脈の東端尾野山山塊）の東端白欠で集約されるまで、南北約4kmの間に平らな地帯が広がっている。南と北の2つの山塊の間には日向山の小山塊がある。ガラス質安山岩の堅い岩よりなる独鉱山塊は、壯年的でやや急峻であるが、小牧山塊・日向山塊は、第3紀の青木層・小川層の頁岩層の砂岩層によって形成されており、老年的な低い丘陵相を呈している。これらの山塊を開析して流れ出した小河川が平らなところを何れも東流しており、南から、唐沢川・中沢川・原沢川・掘田沢川・山王沢川と呼ばれている。

平らな部分は3段の河岸段丘よりなっているが、第1段丘は5つの小河川によって形成された扇状地によって殆んど覆われ、僅かに中山と南原の間に段丘面が残存するにすぎず、ほかは、最も広い第2段丘と、沖積氾濫原である第3段丘によって占められている。各段丘上は、先の5つの小河川や、依田川からの灌漑用水によって大部分が水田化されており、また、扇状地は、小牧山塊からの汎水利用の開田が僅かにみられる外は、殆んどが畑地となっている。

集落の存在をみてみると、上組・中山・南原・北原・飯沼の各集落が平野部の辺縁部、すなわち山麓に位置している。また、尾野山・茂沢の2集落が小牧山塊中の山腹平坦部に立地するのに対し、三角集落は第2段丘上の平野部の一部を占めている。

## 第2節 歴史的環境

今回の一連の発掘調査によって、その内容や性格が明らかにされたり、今後に大きな問題を投げかけることになった中城南・深町・諫訪田・社軍神の4遺跡について、簡単ではあっても発掘調査の成果を一応紹介するに当っては、先述した地理的環境とともに歴史的環境を概観しておく必要がある。ここでは、別図や別表の遺跡について触れておきたい。

依田地区には、遺物包蔵地・古墳・窓跡・条里水田址・城跡など、すでに圃場整備事業などにより破壊されてしまったものまで含め、合計34の遺跡が存在する（存在した）ことが知られている。今後何かの拍子に偶然発見される可能性が皆無とは言えないが、一概に急増することはまずないだろうから、現時点で知られているこの数字に今後とも大きな異動はなかろう。

今日までに知られている遺跡の出土遺物をみると、縄文時代前期以前の時期まで遡れるものはないようである。現在のところ、最も古い時期に属する遺跡は、縄文時代中期初頭型式の土器を出土する井戸田遺跡及び上川原遺跡である。このほかに、縄文時代中期の遺跡としては、深町遺跡・高築地遺跡・芹田遺跡があり、このうち、高築地遺跡出土の土器は加曾利E式土器とされている。

また縄文時代後期の遺跡には、深町遺跡・井戸田遺跡・芹田遺跡があげられる。深町遺跡出土土器については後述するが、縄文時代晚期の遺物とともに、非常な多種多量さが耳目を驚かし、全国でも有数のものである。芹田遺跡の遺物は、最近になってその内容が知られてきたが、後期中葉の加曾利B式土器が含まれていることが分っている外は不明である。しかし、先日多くの遺物が採集されたので、近いうちに内容の詳細な検討が行なわれるはずである。また、井戸田遺跡の後期土器は、後期前葉の堀之内式土器と考えられている。

縄文時代最後の晚期の遺跡は、わずかに深町遺跡がその存在を知られているだけであるが、芹田遺跡出土遺物にも晚期土器が含まれている可能性がある。このほかに、竹の花遺跡が縄文時代後晚期の遺物を出土する遺跡として学会に名高く、また昭和26年には、たまたま土地所有者によって発見された軒跡を、五十嵐幹雄氏が調査され、住居跡が1軒確認されている。しかし、今回の深町遺跡の発掘調査に先立って行なわれた試掘調査の結果、從来竹の花遺跡と称されてきた所の大部分が深町遺跡の範囲に含まれ、深町遺跡の周縁部のごく1部が竹の花地籍にかかっていることがわかった。竹の花遺跡として知名度があまりにも高いが、これからは、徐々に訂正してゆく必要があろう。

これら以外に、明賀遺跡・神社下遺跡が、それぞれ打製石斧・石皿の単独出土地として知られており、縄文時代遺跡とされているが、ほかに出土遺物がないので、遺跡といえるか否かはにわかに決めかねるところである。

弥生時代の遺跡は非常に少ない。現在、井戸田遺跡・上川原遺跡が、ともに後期の箱清水式土器を出土している。両遺跡とも出土遺物の内容がつまびらかでないので、その性格を推し測



第1図 丸子町依田地区遺跡分布図

第1表 丸子町依田地区遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	所在地	迷構・遺物	備考
1	大久保遺跡	包蔵地	歴		宇大久保 (土)後期—高台露水切面	
2	明賀	*	現	大	明賀 (純)打製石斧	単独出土
3	竹の花	*	*		竹の花	
4	深町	*	(中後燒) 横溝		縄文後燒期の遺構遺物多数、平安時代の住居址2、道幅多数	E854調査埋設保存本文
5	土堂	*	包蔵地	土	土堂 (純)土器磨製石斧(土)後期	立合調査・破壊
6	中城南	*	包蔵地	中城	古墳時代後期の土塙跡、平安時代の住居址2、土塁状形	E853調査破壊本文
7	上川原	*	包蔵地	上川原	上川原 (純)中期切頭型式土器・石皿、(符)後期箱済式土器	
8	大沢古墳	古墳	古(後)	大沢	横穴式石室	全墓に近い
9	荒谷	*	*	荒谷	*	*
10	鼓戸遺跡	包蔵地	歴	生	鼓戸戸	
11	四丁町	*	*	四丁町		立合調査・破壊
12	山の神窟址	窟址	*	山の神		
13	山の神古墳	古墳	古(後)	田	的場 横穴式石室	半塹
14	田の入麻社	窟址	歴	田	田の入	
15	原沢遺跡	包蔵地	古(前)	原沢	古墳時代前期のS字状口縁甕有段口縁甕、器台	新発見・破壊
16	大洞窟址	窟址	歴	宇大洞	円筒窓	
17	新源田新開	*	*	大	新源田新開	
18	三角遺跡	包蔵地	古墳(水平)	三角	奈良平安時代の土器器須恵器、グリータフ原石。王作工房被存の可能性有	
19	的場	*	古・歴	的場		
20	社草神	*	集落址	字	社草神 古墳時代全期にわたり住居址50余、内玉作工房6、遺物多数	E855調査埋設保存本文
21	源詮田	*	畠(水平)	源詮田	奈良時代の獨立柱造住居址2、円筒窓4、耳窓2、土塁状形	E855調査埋設保存本文
22	芹田	*	包蔵地	芹田	縄文中後期土器石器、須恵器	新発見
23	井戸田	*	構造・古・歴	井戸田	(純)中期切頭型式土器骨壺之内式土器石器・石瓶、(符)後期箱済式土器(古)・(歴)土領	
24	恋恋	*	構	恋恋	(純)土器・多孔石	
25	大羽	*	古	大羽	(古)前期土器器	
26	日影	*	歴	日影	後期の土器器須恵器内耳	
27	神社下	*		神社下	(純)石皿	単独出土
28	高臺地	*		高臺地	(純)中期加利E式土器	
29	砂原峠	*		砂原峠	(純)石器・打製石斧・石皿	
30	岩谷堂古墳	古墳		岩谷堂	乳文鏡底力鉄錐絞繩車、土器器須恵器	
31	依田条里水田社		歴	大字御嶽堂		
32	依田城跡	城跡		大字生田		
33	尾野山	*				

(注) 一連番号は分布図の遺跡番号と一致する。

るのさえ困難であるが、井戸田遺跡は縄文時代中期・後期の遺跡でもあり、古くから居住適地として選ばれていた場所であったのであろう。

古墳時代になっても、弥生時代と同様に遺跡の数は少ない。今回調査された社軍神遺跡が古墳時代全期を通しての大遺跡であるほかは、社軍神遺跡とは原沢川を挟んで隣接する原沢遺跡が、S字状口縁の壺形土器や器台などを出土する前期の遺跡であること、大洞遺跡が前期の土師式土器を出土すること、調査された中城南遺跡が古墳時代後期の土師式土器を出土することが挙げられるにすぎない。このうち、中城南遺跡は該期の遺構が存在せず、遺物出土量も僅少で、しかも調査後完全に破壊されて水田となってしまったし、原沢遺跡は簡易整備の工事中に発見されて、僅かの遺物が採集できただけで破壊されてしまい、住居跡の存在が予想されたが、結局分らずじまいである。また、大洞遺跡についても、遺物の行方が不明であり、内容は不詳である。従って、古墳時代遺跡としては、遺構・遺物ともにほぼ完全に把握できる社軍神遺跡が、その唯一の存在となってしまった。

一方、同じ古墳時代遺跡ではあるが、前述の遺跡とは性格を異なるものに古墳がある。大沢古墳・荒谷古墳・山の神古墳・岩屋堂古墳の4つの古墳が存在する。このうち岩屋堂古墳は岩窟古墳で一般的な高塚古墳とは様相が異なるが、他は何れも横穴式石室をもつ土盛りの高塚式円墳である。しかし3墳とも破壊の進行が著しく、半壊或いは埋滅に近い状態である。出土遺物についても、岩屋堂古墳は、乳文鏡・直刀・鉄鎌・鋤鎌車・土師式土器・須恵器の出土が知られているが、他の3墳については全く不明である。

歴史時代に入ると遺跡数は急増する。凡そ10遺跡ほどが数えられ、これまでの時代には遺跡の存在が認められなかった尾野山も、この時期には居住地とされるなど、遺跡は依田地区全体に拡がって存在する。

眞訪田遺跡は奈良時代・平安時代にわたる遺跡であるが、その中心は奈良時代にあり、多量に出土した須恵器が、後述する須恵器窯跡群との関りで重要である。また、掘立柱建物跡2棟と、円面鏡や耳皿の出土があり、地方官衙的な性格を有する遺跡として注目された。また、深町遺跡は、5軒の住居跡の外に多くの遺物を出土したが、特に灰釉陶器の多量さと、上小地方最初の出土例となった綠釉陶器の出土で、縄文時代後晩期遺跡としての重要さに加えて、平安時代集落遺跡としてもその重要さが益々認識されるようになった。

以上の外に多くの該期遺跡が挙げられるが、内容がはっきりせず不明な点が多い。そのような中で、三角遺跡は、現在の三角集落に重なって存在するが、広い範囲にわたって遺物が採集でき、相当大規模な遺跡の存在が予想される。

依田地区に存在する遺跡として忘れてはならないのが、須恵器及び瓦の窯跡である。小牧山塊の南山麓に、山の神窯跡・田の入窯跡・大洞窯跡・新原田新開窯跡が知られており、現在合せて10基にも満たないが、今後の新発見が期待されている。かつて、五十嵐幹雄・吉田章一郎・倉田芳郎・大川清・宮下真澄の諸氏により、いくつかの窯跡の発掘調査が行なわれており、9世紀を中心に操業されたものと考えられている。これらのうち、大洞窯跡ではごく最近、円面

観の良好な資料が表面採集され、諫訪田遺跡出土の円面鏡との関係で注目されている。

最後に、条里水田跡と城跡を挙げておこう。条里水田跡は、依田地区水田地帯のうちの多くを占める部分に遺構の痕跡を残していたが、近年の圃場整備事業により、昭和の条里水田に姿を変えつつある。また、城跡としては、依田城跡と尾野山城跡がよく知られているが、依田城跡については不明な点が多い。小さな砦的な城跡は、今後新たに発見される可能性が残されている。しかし、本報告書とは扱う時代がややずれるので、あまり触れないでおく。以上、依田地区に存在する（存在した）30余の遺跡について、非常に大雑把ではあるが時代を追って一通りみてきた。ここで歴史的環境として述べてきたことを簡単にまとめておこう。

縄文時代中期の遺跡は、依田地区の何処ということしなに点在するのに対し、後期晩期の遺跡は、依田川第2段丘の段丘崖に近い所に立地する傾向がみられる。また、弥生時代の遺跡は、後期の箱清水式期の2遺跡の存在が認められるにすぎないが、それも湧水地帯を近くにもつ場所に位置し、自然開拓による稲作を行なっていたものとみられ、その外の部分は殆んど荒地であったのであろう。古墳時代に入ると、遺跡数はさして増えていないが、社・軍神遺跡のような大集落の出現や、僅か4基のみとはいえ古墳が存在することから、経済的基盤の拡大、すなわち水田面積の拡大ということが考えられる。これが歴史時代になると、水田面積は更に広がり、集落の数も自ら増えていった。このことは、依田地区に存在する小河川による灌漑の限界を超えて、より大きな河川、すなわち、内村川や依田川からの灌漑工事の初期的成功がその基盤として考えられ、このことが、ひいては条里水田跡の存在につながっていくのである。また、この時代には、蕪薬が重要な産業としてこの地区にあり、そのことが、諫訪田遺跡のような地方官衙的性格をもつ遺跡の存在の基となっていることは否めないであろう。

長々と、しかも全体のまとめとすべきことまで先に触れてしまったが、合せ考えるための基になることなので、ご容赦頂きたい。

## 第2章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至る経過

小県郡丸子町依田地区には、山中や山麓の須恵器窯跡・古墳を除いても、竹の花遺跡・深町遺跡・土堂遺跡・中城南遺跡・四丁町遺跡・三角遺跡など多くの埋蔵文化財包蔵地が存在する。ところが、この依田地区一帯で大規模な圃場整備事業が行なわれることになった。

そこで、圃場整備事業に先立ち、学術調査を実施し、貴重な埋蔵文化財の記録保存をはかることになり、調査団が編成された。

そして、昭和52年12月11日にオ1回の調査団会議が開かれ、発掘調査の具体案が示され、昭和53年10月7日にオ2回会議が行なわれて、具体的日程が決定され、グリッドの設定場所も決定された。それに基き、去る26日にはブルトーザーによる表土はぎが行なわれ、杭打ち、調査開始に至ったのである。

顧問	一志茂樹	信濃史学会会長・文学博士
参与	高野豊文	長野大学教授
"	小穴喜一	元中学校長
"	黒坂周平	県史主任編纂員
調査団長	五十嵐幹雄	前川辺小学校長
調査主任	塙入秀敏	上田女子短期大学講師
調査員	西沢吉次郎	元丸子北小学校教諭
"	岩佐今朝人	祢津小学校教諭
"	川上元	上田市立博物館学芸員
"	児玉卓文	上田染谷丘高校教諭
"	小原等	菅平小学校教諭
"	林和男	上田市教育委員会主事
"	百瀬新治	依田森南部中学校教諭
"	坂口益次	長門町教育委員会派遣社会教育指導主事
調査補助員	金井寿子	立正大学学生
"	坂口直樹	独協大学学生
"	倉沢克彦	信州大学学生
"	坂井美嗣	長野大学学生
"	小林真寿	"
"	清水隆	"

事務局 教育次長 関千秋  
〃 社会教育係長 佐藤宗市  
社会教育係主事 竹内一徳  
〃 掘内憲明

## 第3章 発掘調査の結果

### 第1節 検出された遺構（第2図～6図）

#### ○住居跡

堅穴式住居跡が2軒検出された。第1号住居跡は調査区北西寄りで検出され、南北約3.9m、東西約3.8mをはかり、南西隅部分がやや突き出た不正方形プランを呈する。東壁中央よりやや北寄りに貧弱なカマドをもつ。土師器高台付壺形土器、鍔釜形土器などが出土したが、出土遺物は少ない。また、第2号住居跡は調査区西北寄りに検出され、南北約4.8m、東西約4.2m、壁高0.2～0.4mの隅丸方形プランを呈し、西北隅にこれも貧弱なカマドを有する。出土遺物は豊富で、土師器壺形土器・高台付壺形土器・足高高台付壺形土器・壺形土器・鍔釜形土器・灰釉陶器碗などが出土している。

#### ○堅穴状遺構

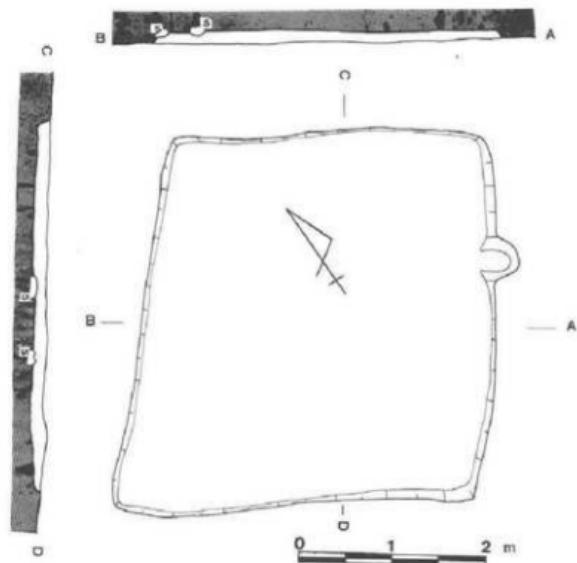
調査区東寄りに検出された遺構で、南北約5.8m、東西約2.7m、深さ10cm弱の隅丸長方形を呈し、南西・東北に長軸をもつ。南隅に人頭大の河原石を集中させている。焼土・木炭・土器が出土したが、住居跡とするには疑問点が多く、一応堅穴状遺構とした。出土遺物は多く、土師器壺形土器・高台付壺形土器などが出土した。



第2図 遺構全測図

○土壤

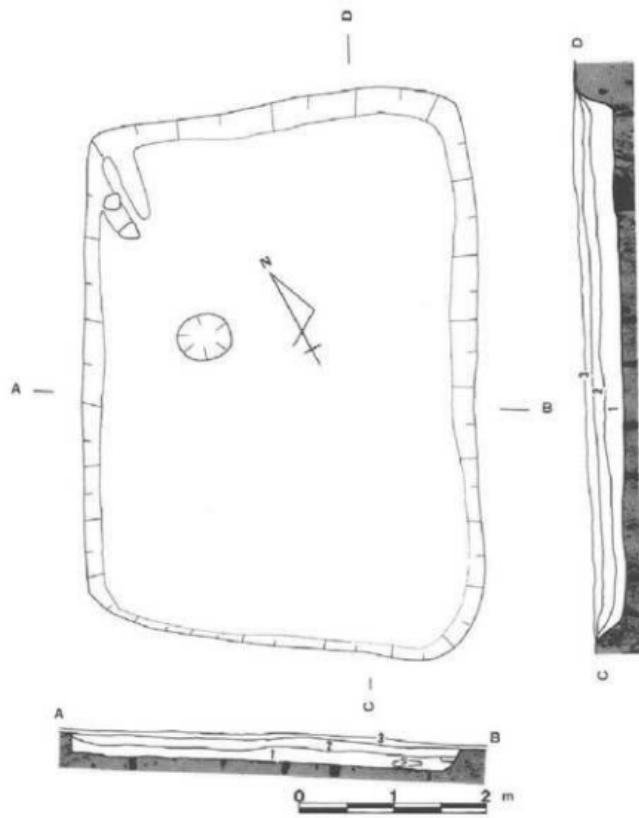
南西-東北に長軸をもち、長径約1.1m、短径約0.8m、深さ約20cmの橢円形で鍋底状を呈する。土壤縁の南北端部に河原石がそれぞれ2~3個かためて置かれ、土壤中からは、焼土・木炭・骨片・骨粉・土師器細片がごく少量検出された。



第3図 第1号住居址実測図



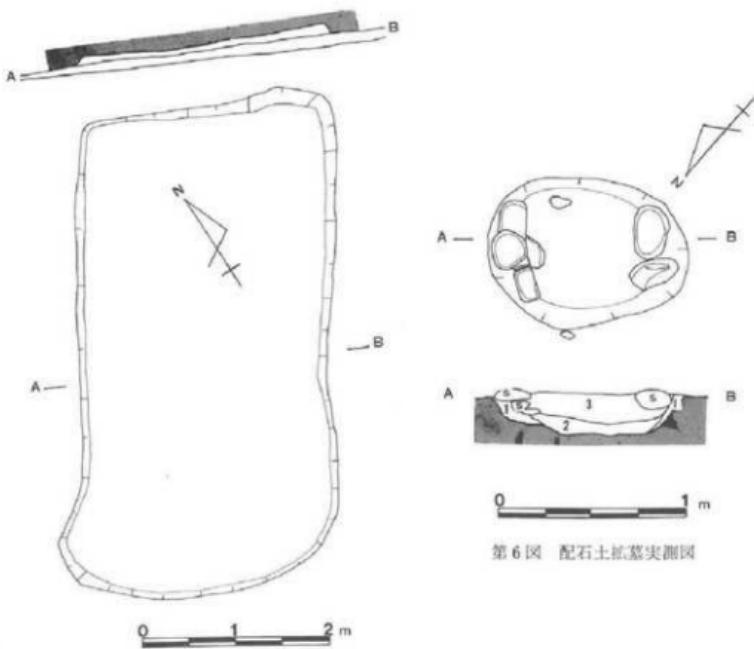
第1図 第1号住居址



第4図 第2号住居址実測図

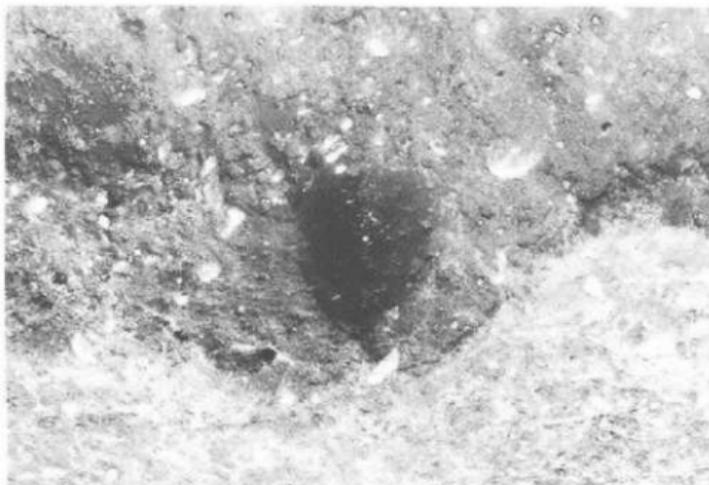


第2図 第2号住居址



第5図 壁穴状遺構実測図

第6図 配石土坑墓実測図



第3図 第1号住居址カマド

## 第2節 出土した遺物

遺物は、前記の各遺構のうち、特に第2号住居跡と堅穴状遺構からは、他の遺構に比べ目立って多く出土しているほか、調査区南東部の黒色土の深い部分からもかなり多く出土している。これらの出土遺物は、その所属する時期で区分すると、大きく2つに分けられる。ここでは、後に問題点を整理するまでの便宜を考えて、所属する時期によって紹介する。

### ○第1群の遺物（第7図）

古墳時代の土器があてられる。土師器壺形土器・甕形土器・高壺・瓶と須恵器甕形土器・平瓶がある。

土師器壺形土器(1~6)は、器形から蓋受けをもつもの(1・2)、内窓する口縁部のもの(3)、底部から稜をもって立ち上がり内縫をもつなどして口辺部が外反するもの(4~6)の3分類ができる。甕形土器(7~9)は、3点とも全器形を知り得ないが、いずれもかなり球形に近い胴部になることを示している。高壺(11)も破片で全器形は判明しないが、脚上部が柱状となる特色がみられる。10は、断言できないが瓶と考えて誤りないと思われる。成形・調整とともにやや難で、恐らく砲弾型を呈するものであろう。

須恵器甕形土器(12)は大甕の頸部破片である。5本1単位の波状文が太く粗雑な描き方で2単位施されている。15は平瓶の口頸部破片である。口辺部で強く外反し、口頸部では内窓して嘴状を呈する。惜しくも体部を欠くが、胎土・成形・焼成とも良好な好資料である。

### ○第2群の遺物（第8・9・10・11・12図）

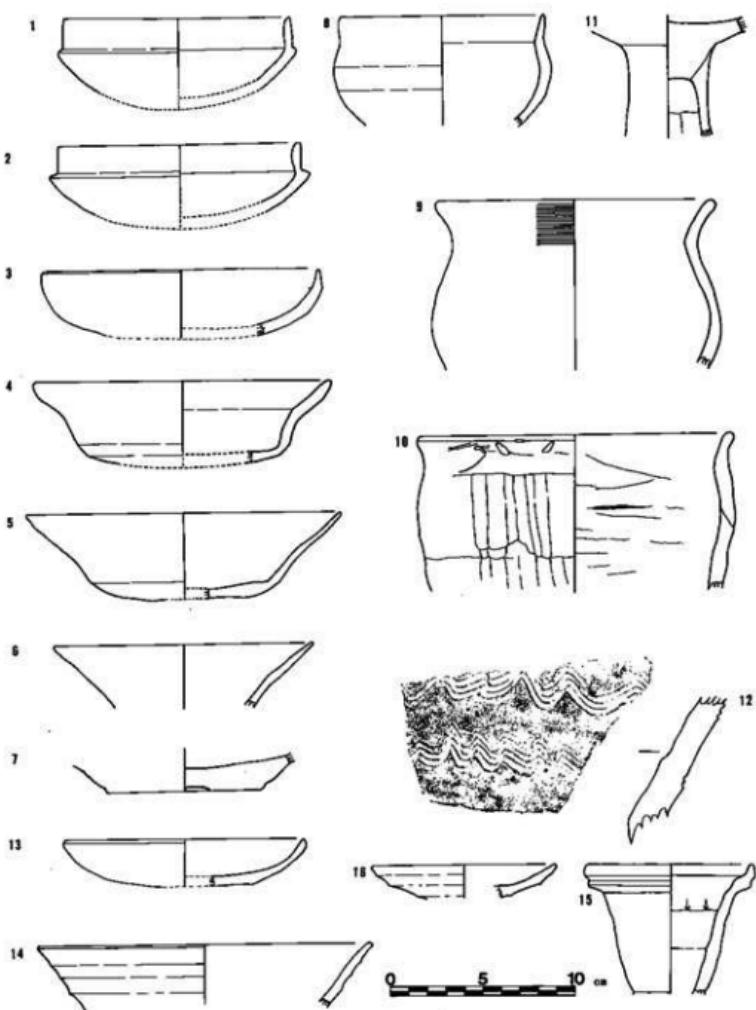
平安時代の土器があてられる。土師器壺形土器・甕形土器・鍔釜形土器と須恵器壺形土器及び灰釉陶器碗がある。

土師器壺形土器（第8図1~10・第9図1~13）は、高台の有無によって2分できるが、高台を有するものは更に、低い高台のものと高い高台を有するもの（第8図7・第9図13）に細分することができる。底部は殆んどが回転糸切りによる切り離しが行なわれている。甕形土器（第10図1~3）は、いずれも頸部のくびれが極く「し」の字状を呈し胴部の長い、いわゆる長胴甕あるいは長甕と称されるもので、この時期通有のものである。また鍔釜形土器（第8図10・11、第11図4、5）は、全て口辺部及び鍔部の破片で、全器形の判明するものは皆無である。しかし、4点とも異なる個体のもので、それぞれ特徴をもつ。中でも3は特異で、鍔部に近接する2つの小孔を有する。この小孔は2つで1組であり、鍔が1周する間には2組ないしそれ以上の小孔があったものであろう。

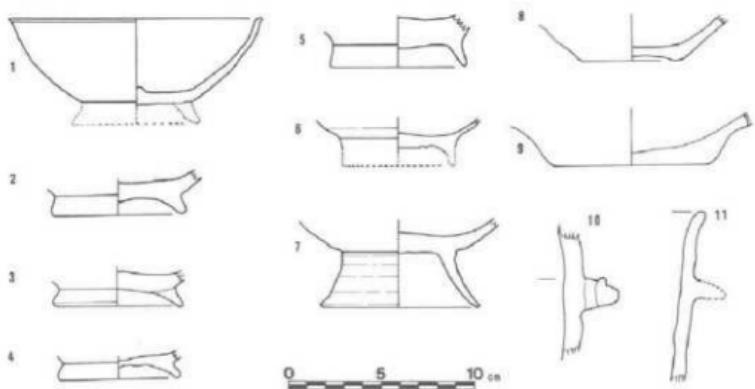
灰釉陶器はいくつもの碗の破片が出土したが、図示できるのは（第10図4）1点のみである。形態・法量ともにこの時期通常のものである。

土器以外でこの時期の遺物と思われるものに砥石（第11図5）がある。偏平・長方形に近いもので、表裏面のほか両側面もよく使用されている。元来もっと長かったものが途中で折れてし

まい、それを更に使用したものである。



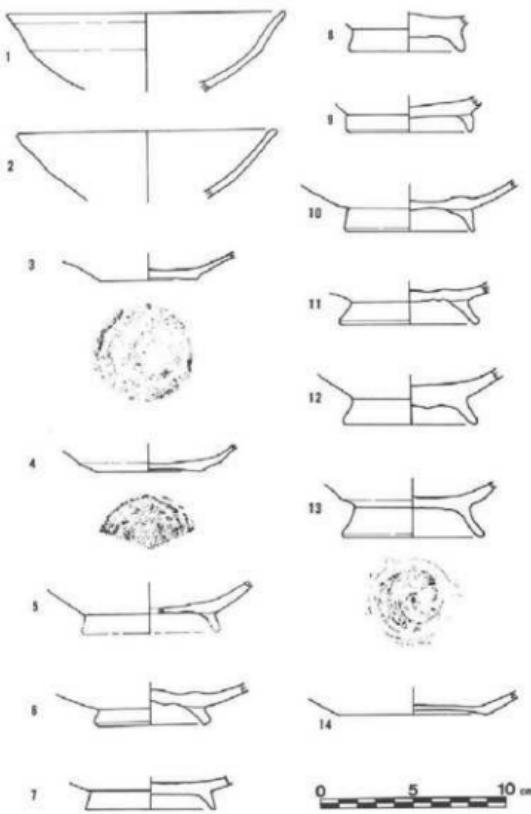
第7図 トレンチ出土遺物実測図



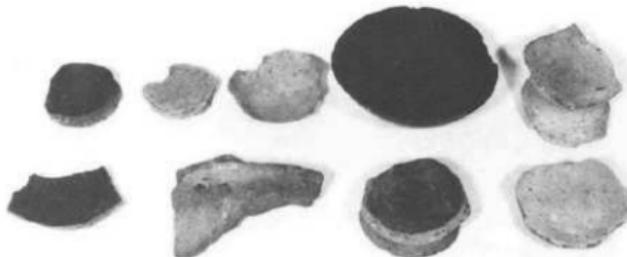
第8図 第2号住居址出土遺物実測図



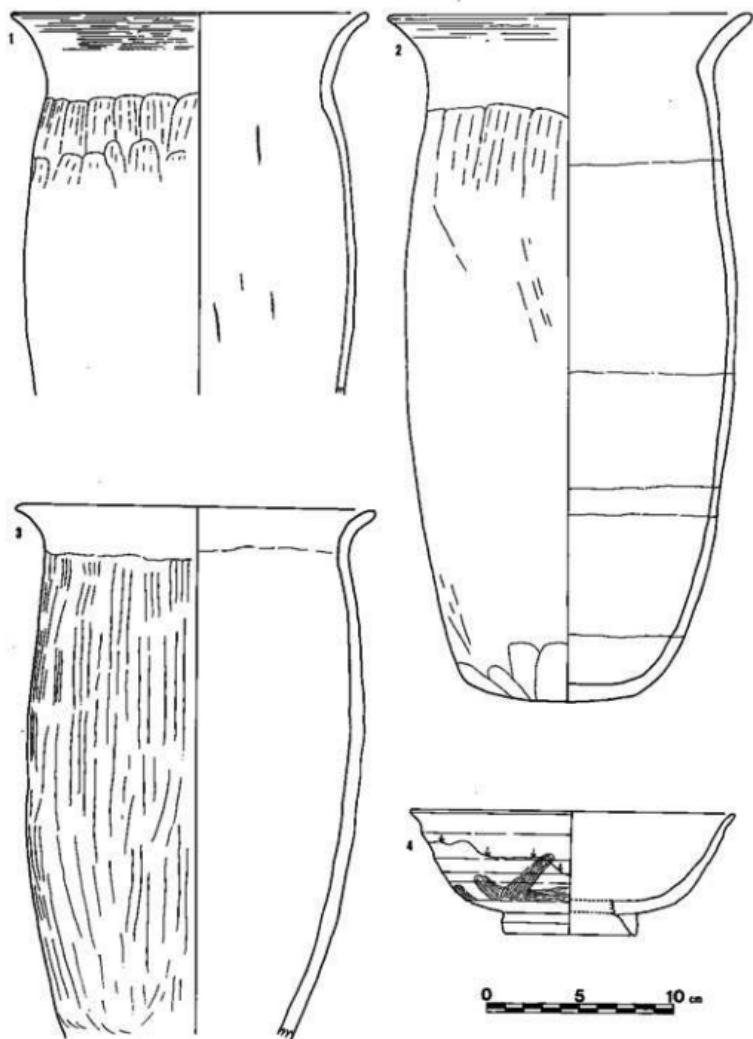
第4図 第2号住居址遺物出土状況



第9図 壺穴状遺構出土遺物実測図



第5図 壺穴状遺構出土遺物



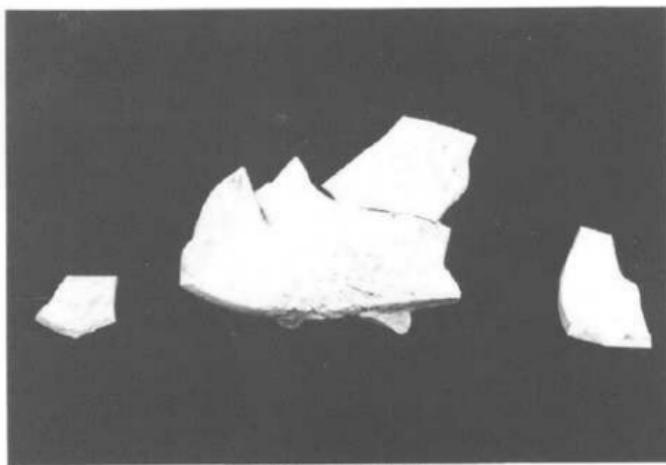
第10図 第2号住居址出土遺物実測図（2）



第6図 第2号住居址出土遺物（長頸甌）



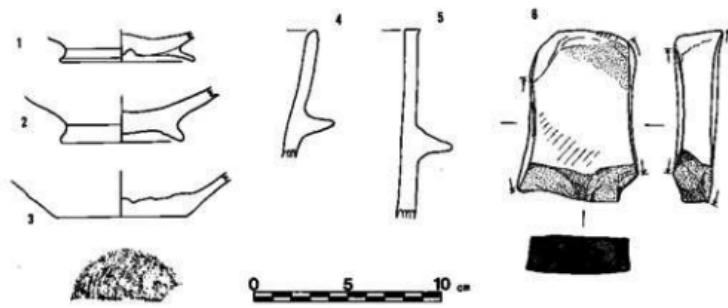
第7図 トレンチ出土遺物（平瓶口頸部）



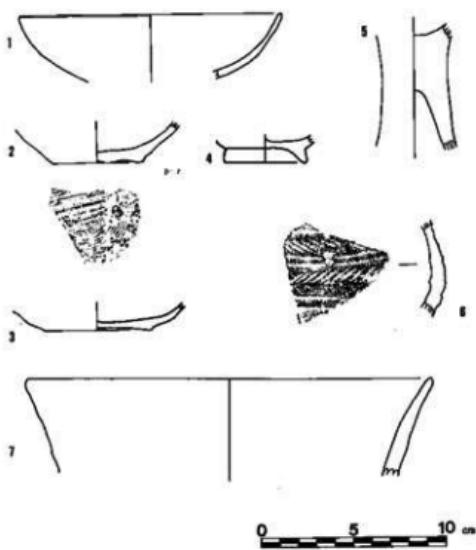
第8図 出土灰釉陶器類



第9図 第1号住居址出土遺物（砥石）



第11図 第1号住居址出土遺物実測図



第12図 包含層出土遺物実測図

## 第4章 発掘調査のまとめ

中城南遺跡は、前述のように出土遺物から、古墳時代と平安時代の2時期にわたって営まれた遺跡であることがわかったが、検出された遺構のうち、2軒の堅穴式住居跡及び堅穴状遺構は平安時代に属するもので、古墳時代に属する遺構は、今回の調査区内には存在しないことが判明した。約400m<sup>2</sup>の限られた面積の調査なので多くは言えないが、遺跡全域のうちには古墳時代の遺構もいくつか存在するであろうし、平安時代遺跡としても、更に大きな規模の集落遺跡であることは容易に想像できる。検出された遺構のうち、土鏡は、骨片や骨粉が出土していることから土鏡墓の可能性もあるが、断言はできないし、また所属時期も不明である。また、堅穴状遺構も、多量の土器の出土があり、何らかの生活に関わるものであろうが、性格は不明である。

調査の結果からは、前述の通り2つの時期が考えられるが、出土遺物を更に詳細な検討することによって、もっと細かく時代区分することができる。第1の時期は古墳時代でも後期の、鬼高期とか善光寺平第3様式期と呼ばれる時期で、実年代では6世紀から7世紀が当たられるが、特に蓋受けをもつ环形土器や球形洞を有する蝶形土器などの特徴から、凡そ6世紀という年代が求められよう。第2の時期は平安時代の後期、国分期とか善行寺平第5様式期といわれる時期と考えられ、実年代では11世紀から12世紀が当たられるが、ここでも、高い高台をもつ杯土器（足高高台付杯形土器）の存在から、特に12世紀を中心をもつ時期が考えられる。

## 第5章 中城南遺跡の有する問題点

以上のように、中城南遺跡は、かなり限定された年代で2つの時期が求められる集落遺跡として大過ないと思われるが、特に問題としなければならないのは、古墳時代遺跡としてである。歴史的環境で既に述べた通り、依田地区に存在する（存在した）古墳時代遺跡としては、恐らく60軒以上にもなる大集落遺跡である社軍神遺跡のほかには、この中城南遺跡と、S字状口縁の甕形土器や器台などの前期の土師器を出土した原沢遺跡、前期の土師器を出土したと伝えられる大洞遺跡が数えられたにすぎず、つい先日、埴輪整備の工事中に、高杯や盤など前期の土師器が週々発見された井戸田遺跡を加えても、僅かに5遺跡が挙げられるだけである。しかも、大洞遺跡は地形的にも古墳時代遺跡としては疑問点が多いし、その上出土遺物の所在が不明で、むしろ除外して考えた方が妥当でさえあるように思われる。こうしてみると、依田地区的古墳時代遺跡は、まずその数が僅少であり、その上遺構・遺物ともにその内容を把握できるのは社軍神遺跡の1遺跡のみで、ほかは全て破壊され、わずかな遺物があるにすぎず、古墳時代の歴史を究明する上では、非常に劣悪な状況にあると言わざるをえない。しかし、それだからこそ、ひとつひとつの遺跡がもつ意味もまた大きいものがあるとも言える。

さて、長野県下で最初に古墳の築造が開始されるのは、4世紀の後半であり、更埴市や長野市篠ノ井塙崎あたりを中心とする地帯においてであった。この地区では、千曲川の後背湿地を生活基盤・経済的基盤とし、自然堤防上に集落を営み、背後の山稜上に古墳を築造している。全長約100mの森将軍塙古墳をはじめ、いずれも県下有数の規模の古墳ばかりであるが、前代の弥生時代後期箱清水文化圏の中心地であり、長野県でも最も早く政治的権力、すなわち在地首長が誕生した地域であることを物語っている。この後古墳時代文化の中心は、松本平の一部や伊那谷に移ったかの感もあるが特に際立って増加する程ではなかった。それが、古墳時代も後期になると、古墳築造は爆発的に増えて、県下に満遍無くみられるようになる。これらの後期古墳は、県下ばかりでなく全国至る所、それこそ津々浦々に至るまで存在するが、これは、家夫長制家族の広範な存在を背景に有力農民が出現することによって、はじめて築造が可能になると説明されている。すなわち、わずかな例外を除いて多くの後期古墳は、農業生産力の拡大を基盤として築造されたのである。

ところで、当依田地区においては、大字生田の山の神古墳・大沢古墳・荒谷古墳の上盛り円墳3基と、大字御岳堂の岩谷堂古墳の岩窟古墳1基がこれまでに知られている古墳である。その内容がわかるのは岩谷堂古墳だけであるが、他の3墳いずれも6世紀後半から7世紀前半の間に築かれた後期古墳であると考えられている。この4墳のうち、岩谷堂古墳はやや性格を異なる。他の3基は全て横穴式石室をもつ一般的な後期古墳であり、3基とも小牧山塊の東南麓に位置している。従って、その対応する経済的基盤としては、当然のことながら眼前に広がる依田川第II河岸段丘面を考えなければならない。しかし、前述の通り依田地区に存在する該当

の遺跡は非常に少なく、しかも、古墳と年代的に対応するのは、中城南遺跡と社軍神遺跡の2遺跡のみしかないのである。このことは何を意味するのであろうか。

当時の依田地区における農業——水田耕作は、5つの小河川と湧水のわずかな水量に頼って営まれていたことは、想像に難くない。内村川からの引水は後世のことであり、まして依田川から水を引くことなどは、ずっと後のことなのである。そうなると、古墳時代の水田面積はおのずから限定されてしまい、従って集落の存立も制約されてしまう。このように考えると、遺跡数の少いことも納得できるのであるが、わずか3基のみの存在とはいえ、それを支える基盤が劣弱すぎると思われるのであるが、どうであろうか。社軍神遺跡の古墳時代前期にかかわる部分は、玉作りを業とする職業集団によって営まれたものであるし、また、奈良時代遺跡のうちのいくつかは、須恵器や瓦を焼く窯業に從事した工人達によって営まれたものであると考えられるが、この古墳時代後期には、稻作以外に生業が考えられないであるからなおさらである。地域全域の遺跡が隅から隅まで調査されない時に、根拠の乏しい想像をするのは戒めなければならないが、遺跡破壊の進行が急速であるいま、常に生産遺跡・生活遺跡それに古墳などの葬祭にかかわる遺跡相互の有機的関連を考えいかなければならぬのである。それだからこそ中城南遺跡の重要性も浮かび上ってくるのである。

ともかく、中城南遺跡からの古墳時代遺物の出土は、限られた範囲からのわずかな出土であるため、あまり多くを言うことはできないが、依田地区開発の歴史を解明するため、また古墳の存立基盤を与えるためのひとつの鍵になるものであることは言うまでもない。

最後にもう1点だけ、中城南遺跡の発掘調査によって得られた重要なことを挙げておこう。それは、足高台付环形土器の出土である。これは平安時代の終末期を画する土器であり、これ以後は、わずかな土師質土器が残存するのみで、多くの什器は木器にとって替られると考えられ、土師器終末期の指標ともされる土器である。これまで、北信地方に出土例が多く、東信地方には殆んど例がないとされていた。今回の出土例は、第2号住居跡内からの出土であり、遺構に伴うという重要さのほかに、伴出遺物として、土師器長胴甕形土器・鍔釜形土器及び灰釉陶器碗があって、須恵器が皆無であるという点になお一層の重要性がある。足高台付环形土器については、今まで例の少なかった東信地方においても、最近は若干ではあるが出土例が報告されている。その中にあっても、中城南遺跡の例は、土器組成が確実に把握できるという点で、その資料的価値は高く、該研究に益するところは非常に大きいと言えよう。

1979年3月

## 中城南

—中城南遺跡発掘調査報告書—

編集 丸子町依田地区埋蔵文化財発掘調査団

発行 丸子町教育委員会

長野県小県郡丸子町大字上丸子 1592 の 2

TEL 02684(2)3147

印刷 信毎書籍印刷株式会社

長野市西和田 470

TEL 0262(43)2105

